

授業づくりに必要な五つの心構え 自立を見据えた授業づくり

連載⑨

大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

第五の心構え「自立への道」

「自立」とは、自らの足で立つこと。
足は、自分の身体を支えなければいけない。

立てば、身体に風が当たってくるだろう。
そして、歩く。左に行くか、右に行くかを自ら選ばなくてはならない。

誰かに依存せず、自らの責任として、自らが決めた選択で行動できること。
それが「自立」である。

授業中に孤独な作業を課す

日々の授業が自立への道につながるように、私は授業の発問や指示を考えている。
現在、私は五・六年の理科専科である。
先日、五年に一人一個のインゲンマメの種を配り、次の発問をした。

「種を見て気が付いたことを書きなさい。」
気が付いたことをいきなり挙手指名で、発言させたりはしない。

まずは、自分一人の頭で考えて、ノートに書かせていく。

「時間は三分です。三分で五個書ければ、五年生として合格です。」

時間を区切り、評価基準を示すことで、軽く子どもたちを追い込む。負荷をかけることで、個を鍛えられるからである。

三分後、いくつ書けたかを挙手させてから、列指名で三列ほど、発表させる。

挙手ではなく、強制的に指名させられることも、負荷の一つとなる。

- ・ つるつるしてる。
- ・ 真ん中にすじがある。
- ・ 球体。

「それ以外の気がつきがある人、立ちます。」

ここで、発表したいことは発表できる。
自ら立って、発表できることを大いに認めていくのである。

授業中における孤独な作業が、自立への道の一步となる。

選択の責任を負わせる

先ほどの発問は、何を言っても正解になる、いわゆるマルチ発問である。

マルチ発問より負荷のかかるのが、セレクト発問である。

自らの責任で選択させるのである。

「発芽には何が必要ですか。発芽に必要なものを全部書いて持ってきたさい。」

全部である。一つ抜けてもいけない、一つ多くてもいけない。

あるクラスでは、次のものが出された。

- ・ 光 ・ 人間 ・ 水 ・ 日光 ・ 太陽
- ・ スコップ ・ 土 ・ 養分 ・ 花だん
- ・ ひりようがまざった土 ・ ひりよう
- ・ 気温 ・ 材料 ・ 適当な温度
- ・ 種 ・ 空気 ・ じょうろ ・ 芽
- ・ 時間 ・ 日の当たりやすいばしょ
- ・ 海 ・ 適温

他のクラスでは、ミミズ・エネルギー
ー・気持ち・雲・自然・地球・コットンなども出された。

この後、自分の選択したものに対して、質問や反対がなされる。

選択の責任を自ら負うわけである。

自立を見据えない授業とは？

「自立を見据えた授業づくり」を考える上で、「自立を見据えない授業」とは、どんな授業なのかを考えてみた。

① 一問一答の授業。

自分が答えなくても誰かが答えられればいい。人任せになる。

② 自由度が少ない授業。

教師がのぞむような答えしか言えない授業。

③ 指示されたことに従うだけの授業。

いわゆる指示待ち人間を育てる。

④ 当たり前の答えしか出てこない授業。

⑤ 答えが一つしか出てこない授業。

その理由を考える必要もない。

⑥ 賢い子中心の授業。

多数派が正解し、学力の高い子が正解する。

「自立」というと、学級づくりのことを考える先生が多いだろう。

しかし、授業そのものが、子どもたちの自立を妨げる場合が多いのである。

自立を見据えた授業とは？

では、「自立につながる授業」とは、どんな授業なのだろうか。

① 一問多答の授業。

他の人が思いつかない答えを出そうと考える。

② 自由度の多い授業。

教師からは出てこないような答えがお互いを刺激する。

③ 授業展開の予測できる授業。

「先生は次に何を聞くと思いますか」と問われ、想定できる。

④ 意外性のある答えが出てくる授業。

⑤ 答えを選んで決めて、理由も考える発問の授業。

⑥ 逆転現象が起こる授業。

少数派が正解だったり、学力の低い子が正解する。

手前味噌になるが、『二つの発問で組み立てる授業』（フォーラム・A）で、私が提案したマルチ発問とセレクト発問が、自立につながる授業を作るのである。

予習と復習、どちらが自立を促すか？

最後に、読者の先生方にセレクト発問を出そう。

「予習と復習、どちらが自立を促すか？」四月の下旬に、久保齋先生が新著を出された。

された。

『予習展開による国語科授業づくり』（小学館）である。

久保先生がこの本の出版記念講演会で次のようなことを話された。

「社会人であれば、新しい仕事に取り組みとき、予習していきます。でも、それは収入を得るために必要な行為といえます。」

自立した大人は、予習して、物事にのぞむのである。

であるならば、復習よりも予習の方が、子どもたちを自立へと導くといえよう。

「自立」とは、自らの足で立つこと。

しかし、いきなり立てる子はいない。

十分にハイハイさせ、つかまり立ちさせ、少し歩いて転ぶ、ということを経験させていかないと授業の中で、体験させていけないのである。